

佐古純一郎著「森有正の日記」(新装版)朝文社 2009年7月21日刊を読む

## 1. 誠実であるためには

### (1) 歩き続けること

一歩でもよいから前に出ること

### (2) 凡てはかえりみることから出て来る

### (3) 時を一杯に満たすこと

時はその後に空洞跡を残して経過していくこと

時がその跡に充足を残すようにするにはどれだけの忍耐強い、倦むことのない労働が必要とされることか

### (4) 死以外には待つものなど何もあはしない

自分の生涯の最後の時期を、力尽きて倒れるまで覆い尽くしたい。(P6)

### (5) 死の怖さは、徹底的に生きなかったこととも関係するだろう。(P7)

## 2. 内からの促し(solicitations interiores)

### (1) 日本は遙(はる)か彼方に薄れていく。

・そして私の中に、本当の自分の生を生きたい、という祈願にも似た思いが刻々に強くなって行った。

・この祈願、あるいは想念は、私がかつて内からの促し(solicitations interiores)と呼んだものと同じである。

### (2) 唯一回限りであるこの自分の生を徹底的に生きたいというえたいの知れない願い、殆んど祈願にも似た願い(P24 ~ 25)

## 3. 円環的復帰

自分の魂が同一であること、稚いこと、血気盛んであること、老い衰えていること、そういうことを越えて一つの魂が持続するものだということが一つの確信になってきたということ(P35)

## 4. 日本人であるということ

### (1) 漱石文学の特色は、最大の問題の一步手前で停止すること。

あのドフトエフスキーのつきぬけてゆくところがない。

(2)この限界は実に重要である。

この限界をこえるところに精神は精神としての意味をもって来るのである。  
存在は存在の意味をもって来るのである。

(3)この限界は「日本」ということとぴったり一致する。

生きることとは、したがって文明は、日本より大きい筈だ。  
しかし、この限界の内部でゴタゴタ言っていることは全部たわごとである。

(4)日本人の限界をつきぬけていくことができるかどうか、それがこれからの日本文化の根本的な課題であるといつてもよいかもしれない。(P41)

(5)僕は今、自分のことだけ考える。

国の運命を考えない。  
これは国を愛さないからではない。  
これが僕にとって国を愛するために残された唯一の道だからである。P43)

## 5. 日本の古典について

(1)今日ソルボンヌで1956年 - 57年度の文学史の講義を終えた。

(2)これで平安時代を終ったので、11月から鎌倉時代に入る。

この講義は学生のため、というよりは自分のためにやっているようなもの。  
学生は数が少ないが、そういうことではなく、国文学がこれほど自分の養いになるとは夢にも思わなかった。

(3)自分の中にある生来の資質と抵抗を起こさずに和合するもの、しかも、それで形をなしているもの、がそこにあるからだ。

ここにも亦(また)、ヨーロッパとは別の意味で自分の資質を洗い出してくれるものがある。  
(P45)

## 6. ドフトエフスキー

(1)ヨーロッパというのはほとんど宿命のようなものであって真似ることも学ぶこともできない。

(2)日本は自分の宿命に生きるほかはなく、事実あらゆるまやかしゃ、たばかりにもかかわらずそうになっているのである。そうなるよりほかはない事態なのである。

(3)しかし、もっと重大なことは、宿命を唱えることではなくて、大切なのは宿命を脱却することである。そうなるよりほかはない事態なのである。

(4)ドフトエフスキーを読む時に、自分の経験を生き抜くほかはない

(5) その生き抜く瞬間、瞬間が、宿命でも空想でもないことをその都度教えてくれる。

(6) ドフトエフスキーが生まれてから、今年(1971年)は150年目である。かれの問題はますます今日の問題である。(P84 ~ 85)

7. 1年に1冊選んだテキストを精読するということは森有正の読書の一つの特色である。(P86)

8. 内からの促し

(1) 日本という国は昔から内的促しを殺しに殺し続けてきた一人の人間が真実に「個人」になるということ、

(2) 「その人になる」ということは、この「内からの促し」に忠実に生きるということによってなので…。(P94)

(3) 内からの促しに従っていれば、不可能なことも可能になるのだ。(P96)

9. 孤独の深みにおいて

(1) 孤独は孤独であるがゆえに貴いのではなく、運命によってそれが与えられたときに貴いのだ。自分で勝手に作り出した孤独ほど無意味でみにくいものはすくなくない。  
本当の孤独は、孤独からは生まれない。

(2) 運命とは、「内からの促し」に忠実であろうとする生きざまのこと。

(3) 本当の孤独とは、人間の本来からわき出してくる孤独。

(4) 自分自身に耐える。

バビロンを辿る道とは、自分の経験の山脈を尾根伝に進んでいくこと。(P102 ~ 105)

10. 定義とは

(1) 定義とは経験そのものだ。(P146)

(2) 定義すること、それが僕の人生の意義である。しかし、何を定義するのか。愛、真理、徳、善、生、それにまつわる言葉をかくも頻りに用いながら、その意味の実際には判っていない凡てのことどもを、である。

(3) ひとつの事を定義するとは、何と高貴な責務であることか。それは人間たるに値するものだ。創造とは定義に外ならない。アラン、デカルト、パスカルが、すぐに身近にも見え、遙(はる)かに遠くかけはなれても見える。耐えること、維持すること、粘り抜くことそれが僕のなすべきすべてである。僕の人生に新しい展望が開けてきた。

(4)

(5) 定義とは、伝統そのもの。

伝統とは、ひとつの文明の最も明確な部分であり、それによって文明は自分の性格を持つ。

人はいかなる文明の伝統の内に自分を見い出すのか、それは、初めからは決して判らない。

ただ、その形はどうあれ自らを定義するに到ったとき、初めてどの伝統に自分が属するのかわかるのである。そしてその時、伝統はその人のものであることを明らかにするこの地点だけが運命というものを語りうる唯一の場所である。

自由な経験を経たその出口において本当の運命が現われる。これこそが避け難い彼の運命である。(P219)

(6) 今居るところに僕は自分を見出したのだ。

だからこれはどう動かすすべもないものなのだ。

明らかにこれは運命である。(P221)

(7) 僕の経験が何物かを定義しはじめた。

この何物かに僕は運命という名を与える。

それは、僕独自の自由に到るまで無限の発展性を帯びている。(P222)

## 11. 日本語教科書について

(1) 日本語における一人称の問題が頭を離れない。

(2) 日本語を正しく学ぶためには十分に準備された語彙(ごい)がどうしても必要だ。

(3) 言語、哲学、文学に関わるこの3つの本を書くことによって生きるために必死になって20年間遂行した労働を通じてソルボンヌ、及び東洋語学校で僕の行う教育活動の組織が出来上がるであろう。これは僕の日常活動の歩み方を示すこと。

純粋に自分自身のために、自分に自分を証明するために僕の生涯はあの透明な色をしたイランの綴織り、鮮やかな、濃密な、そして細部に到るまで綿密に仕上げられたタピスリーのようなものでなければならない。(P227)

(4) 大切なことはこうした様々な仕事を明確に限定された枠の中で関係づけることだ。これは各々の作品が本質的な構成要素をなすひとつの建築なのである。結局、唯一にして独自の僕の全経験が開花するということなのである。

もはや実存にかかわる爆発は必要でない。

労苦に満ちた長い歩みが必要とされるだけである。(P229)

## 12. 信仰を抱いて

(1) 経験とは、あるものではなく、人間の状態。

状態である以上は一つの状態から他の状態に移っていくこと。

(2) 時間ということばに代表される。

人間における時間というのは人間の経験ということ。

(3) 最後は死に向って進んでいく。

死は人間の経験。

死は動かすことのできない人間の目標。

人間の経験の最後の目標は死。経験は死をもって終る。

(4) 神の前における罪があったら、人間は死ぬことができない。

罪が解決できないでいたらその罪は永遠に残る。

キリストの十字架は罪の贖いであることを感じる。

(5) 人間は罪にめざめるよりほかにない。

罪が解決しないでどうして死ぬことができるか。

罪の根源的な解決なくして人は死ぬことはできないのだ。(P236)

#### [ コメント ]

森有正先生の ICU での「人格の基礎」という講演は非常に印象深いものであった。この佐古純一郎先生の著作は、森先生の生涯を日記と著作を読み尽くされた上で出版されたもので、先生の「理解」を深めてくれ、有難い。

- 2009 年 8 月 25 日林明夫記 -